新潟・茨城・千葉各縣に於ける姫春蟬の知見*

高 島 春 雄

I 結 言

ヒメハルゼミを学術的に記録した最初の人¹⁾は谷貞子氏(昆虫世界第9巻第91号 1905年)で、ハルゼミに似て形小さく姿優しい故にヒメハルゼミの新称を附して記載したが、天籟は判然としないままに Gn? sp? となさつた。それより 10 年以上もたつた 1917 年、松村松年博士は千葉県八幡山を模式産地として *Euterpnosia chibensis* という新属新種として発表なされた(札幌博物学会報第6巻第3号)。ヒメハルゼミの♂の第4腹節の両側に疣状の突起あるのを特徴として類似の諸属と区別したのである。本種の属種名に関しては今日疑義ないものと考え筆を進める。ヒメハルゼミ属は現在台湾に多くの種を分化させているが中で最も北進したものがヒメハルゼミである。本種は琉球から本州まで分布しいわゆる東洋区系種で、その本州に於ける北進の限度はモンキアゲハ、クマゼミ等にやや似ている。本州に於てはその発生地連続せず、成虫の鳴噪期間短く、斉唱の奇習あつて喧しく、形態的特徴と相俟つて日本産の珍しいセミの一つである。茨城県²⁾の片庭では本種に関する面白い伝承さもある。私は一昨年(1952)の夏から本種分布の北限、東北限に当る発生地、その他関東地方に於ける発生地の巡歴を企て5箇所を歴訪することが出来たので、その際の見聞を綴り後日の備忘としたい。私の蟬行脚の際は東京農工大学農学部学生成瀬幹也氏が終始行を偕にし、労苦を分れたのであつてその為便利する所が多かつた。同好の士たる成瀬君に感謝の意を捧げたい。

II 新潟県能生の発生地

谷貞子氏が始めて本種を記載した時の産地は千葉県の他に新潟県があつた。当時の採集者にして標本提供者たる佐藤栄氏は故人となり、産地の判明せぬままに 30 年の歳月が流れた。1934 年 7 月、当時新潟高等学校教授江村重雄氏は西頸城郡^{にしくびきの}能生町に採集を試み、その際或るセミが羽化しつつある状景を写真に撮つた。1936 年江村氏は重ねて同じ地に陸産貝類等を採集して 1 蟬蛻を得た。これにより同校生徒馬場金太郎氏はヒメハルゼミなることを確認、翌年(1937)には更に地元の人から成虫標本をも入手することが出来た。これらの資料により江村・馬場両氏は 1938 年新潟高等学校博物同好会会誌「自然研究」第7号誌上に「新潟県のヒメハルゼミ産地確認記」を公にされ発生地は能生町大字能生の白山神社樹叢ときまつた。実はこの地は暖地性の樹種に富みアカガシやツバキの大木が多く常緑闊葉樹の密林といった感じで、日本海岸北陸の地としては稀有の林相を呈しているので「能生白山神社社叢」として昭和 12 年(1937) 12 月天然記念物に指定されていた。昔から此処を神山の森、権現山の森などと称し

* Haruo Takashima: On a remarkable cicada *Euterpnosia chibensis* in the central parts of Honshû, Japan.

神罰ありとして枯枝さえ採取を禁ぜられていたので鬱蒼たる樹林は今に温存、そこが又ヒメハルゼミの発生地として残つたわけで、新潟県に於て現存唯一の発生地であり、日本海沿岸地方に於ても同様であり本種分布の上からは北限となるので、そのような見地から同じ場所が昭和 17 年 (1942) 10 月「能生姫春蟬発生地」として天然記念物に指定された。ここは日本海の高波脚下に匍い寄り僅かに岬状に突出した山地で北緯 37°6′ 東経 138° に当る*。今日まで新潟県下には他に発生地の知られた所がないが、同県在住の昆虫研究家の中には能生よりもっと東北にも産地があるのではないかと推測し注意を怠らないでいる御方もある。それは前記佐藤氏は新潟県岩船郡神納村^{かんの}の御方で(地図を披いて神納村の所在を知られるとよい)当時能生まで汽車は開通していなかつたから能生にまで採集に行かれたかどうか疑問がある;もし岩船郡内で採集したものなら能生以外の産地が考えられる——というのである。これは宿願として現地の方々の不断の御注意に俟つほかはない。

第 1 図 千葉県産ヒメハルゼミ 左から♀, 脱殻, ♂ の
体長 26mm, 翅端まで 38mm [高島]

私は能生のヒメハルゼミ
の声を一兩年前ラジオ (N

HK) で偶然聴き、いつか 1 度は現地調査をしたいと願っていたのであるが 1954 年 7 月下旬宿望を遂げることが出来た。即ち 7 月 22 日午前 8 時 20 分上越線新潟行で上野発、午後 3 時 36 分宮内 (新潟県) 着、ここで信越本線大阪行に乘換えて同 45 分宮内発、直江津でそのまま北陸本線となり 7 時 21 分能生駅に着いた。白山神社やその社叢は駅に着くほんの少し前に車窓右側に眺められる。そこ迄駅から東北 1.5km、一本道を徒歩で 15~20 分の距離である。駅前から団体バス、ハイヤー等の便宜もある。白山神社に到つたが既に日は全く没し、ヒメハルゼミの日没前後の盛な斉唱を聴くには遅すぎたので海岸近くの多喜屋という宿館に泊ることにした。この地は漁港であり又海水浴場、名勝の地でもあり沿革の古い水産学校 (今県立能生水産高等学校) がある。長野県あたりでは中学生や高校生のためこの地で臨海学校を開くのが戦後の慣いらしく、そういう連中で海浜地帯は賑つていた。翌 23 日午前中海水浴場や眺望のよい弁天岩を経て神社の鳥居前に到つた。向つて右手に角礫状の木があり 3 面に夫々天然記念物能生白山神社々叢^{姫春蟬} 昭和廿五年七月建之 史蹟名勝天然記念物保存法に依り白山神社々叢 昭和十二年十二月 姫春蟬 昭和十六年十月 文部大臣指定 の文句が縦書されている。この日晴れ

* 本種は九州の離島では屋久島、奄美大島、北大東島から沖縄本島に分布し後者が分布の南限となる。

て夏らしい暑さ、天候異変で一兩日前から漸く夏らしくなつたとこの地に来て聞き及んだが、ヒメハルゼミの発生も遅れて今が盛りのように感ぜられた。成虫が樹幹に静止しているのも見たし殻も確認したが、他に蟬ではニイニイゼミとヒグラシが出ていた。この神社の鎮座は遠く崇神天皇 11 年 (87) と云われる。宝物には国宝指定の観世音があり古びた本殿は足利時代永正 12 年 (1515) の建立で準国宝的存在と看做され、昭和 27 年 12 月 10 日新潟県文化財に指定された。社叢入口に近く板面あり、社叢並びにヒメハルゼミが天然記念物に指定された所以を説明してある。当時新潟高等学校教授真保一輔氏の撰文らしいが達意の文章であるから次に掲げる (原文は縦書)。

天 然 紀 念 物 白山神社々叢並に姫春蟬

“此処社叢は東経一三八度北緯三七・六度にあり日本海に岬状突出する海拔九〇米の山地である。基岩は輝石安山岩質の集塊岩で概ねその上を厚い礫質壤土が被つている。この社叢は寒地性樹種と暖地性樹種とが混生し北越海岸地方の植物分布を示す稀な林相であり天然記念物として指定されている。一般に常緑潤葉樹が多く殊に峰間溪谷状を成している所には喬木が茂つている。その主なものは落葉潤葉樹にケヤキ、ホホノキ、ミヅナラ、クルミ、エノキ、ウハミヅザクラ、イタヤカヘデ等、常緑潤葉樹にアカガシ、ツバキ、イヌグス、シロダモ、モチノキ、ヒサカキ等、常緑針葉樹にクロマツ、アカマツ、スギ等がある。アカガシの純林やツバキの純林を含み又ケヤキを主とした部分もありイタヤカエデ、エノキ等も相当多数見られる。

第 2 図 能生白山神社社叢所在地 陸地測量部五
万分一地図より〔三好学氏の調査報告書・
より採る〕

動物群は著しく南方系の要素を含み昆虫にはヒメハルゼミ、アオスズアゲハ、キマダラカミキリ等を饒産しアオバハゴロモ、タイワンオホゴキブリ等が棲息し陸産貝類にはチハダビロウドマイマイ、シイボルトコギセル等を産す。姫春蟬は天然記念物として指定されたもので東洋熱帯性の蟬でその発生は比較的狭い範囲に限られ其の習性上特に珍しい種類である。七月上旬より下旬にかけて発生し最盛期は廿日から廿五日頃である。

この蟬の鳴声はカルル……メンニョーニョーと音律的に聞える。最初一、二の音頭取がカルル……メンニョーニョーを二三回繰返して歌えば全山一斉之に和し恰も木の葉に雨の降りしきるような所謂蟬時雨となる。この合唱は普通五分乃至一〇分毎に繰返し行はれ朝六時頃から夕六時まで続けられる。体長僅か三五耗内外の小蟬で高い樹上に居て容易に発見

できない。此の社叢にのみ発生し附近の山林に発生することは未だ知られていない。而かも此

処が我国分布の最北限地帯に属し日本海岸では現在知られている唯一の発生地である。由来白山神社は神雲四方に耀き町民近郷はもとより、広く往古より信仰の中心であり社叢は千古鉞を入れた事のない幽巖な地として保存され此処に棲息する姫春蟬は學術上重要な意義を有つものでこの誇るべき二つの天然紀念物は永久に愛護保存すべきものである。”

1953 年 7 月 19 日越佐昆虫同好会の虫談会が能生の地に開かれ、併せてヒメハルゼミの発生状況の視察が行われた。同好会の人々により能生産昆虫目録も発表されている (馬場金太

第 3 図 能生白山神社社叢全景 左は海 [三好氏の調査報告書より採る]

郎・樋熊清治・吉沢正治・丸山良知——ヒメハルゼミの北限地帯能生の昆虫相を探ぐる——越佐昆虫同好会々報第 7 巻第 3 号第 83-85 頁 1953)。それに拠るとこの地に産する蟬類はニイニイゼミ、アブラゼミ、ミンミンゼミ、ヒグラシ、ハルゼミ、ヒメハルゼミの 6 種でツクツクボウシは棲息せぬらしい。上記目録にないヒメカマキリモドキを私達は旅館の硝子戸に飛来静止したのを得た。町内の能生中学校に生物クラブがあり同校教諭丸山良知氏その他の人々によりヒメハルゼミの発生状況に関し色々と調査が行われているとのことである。駅から東南の丘陵上に県立能生水産高校があり、50 年以上の歴史を持ち地方水産学校として日本最古のものらしい。折よく 7 月 20 日から校内を開放し海の科学展覧会というのをやつていたので、それと校舎の一廊を占める海洋博物館とを見学し有益であつたが、展覧会のほうにヒメハルゼミ 4 頭の標本が出されてあつた。

この社叢にはシイを混えていないがその代りをアカガシの大木がしているらしい。この社叢は昆虫採集には好適の所たるを信じて疑わないが天然紀念物指定境界線内では植物は勿論、動物も一切採集しないほうが望ましいのは勿論である。幸に地元の人々はこの社叢を聖地視して滅多に出入りもせず又他所から動植物の採集に來た人もほとんどなかつた為よく温存し得たわけである。丸山氏の中学校でも生徒に対し社叢の動植物採集を固く禁止しておられるという。この能生の町は観光地として観光協会なども結成され、戦後は観光客誘致に色々力を尽してい

るようであるが「社叢を公園として開発する」などというのは観光客誘致の方策としては寧ろ拙いのであつて千古斧鉞の入らざる森林、それも北陸などでは珍しい常緑闊葉樹の密林たることを宣伝し、又ヒメハルゼミのシーズンには進んで聴蟬所とも称すべき亭を設けるとか、この蟬の廓大原色図を神社のどこかに掲示するとかすべきである。観光協会は現在このセミに関しては少しも宣伝していないように見受けられる。この神社に昔^{しよじ}汐路の鐘という名鐘があつたことに因み汐路音頭という唄が作られそれはテイタクレコードに吹込まれている由。盆踊りの時などに唱和するのであろうがその第2節に「夏の盛りを姫春蟬が（ソレよいよい）もろい命を鳴いている（ソラ唄えよ踊れよ 皆そろつて輪になつて）」とある。この汐路の鐘については「天然記念物調査報告 植物之部第十七輯」(文部省刊 1937) に詳しい。尙町に料亭で“姫春”というのがあつたのも土地柄らしい。斯くて午前 11 時 45 分能生発、直江津から信越本線で夜 11 時 3 分上野に帰着した。東京方面からの日帰りは駄目であるが、このようにして一泊すれば無理しないで十分調査の目的を達することが出来る(旅館は 1 泊 2 食付相当御馳走があつて 600 円位)。

帰京後能生中学校の丸山良知氏から詳しい御来信に接した。その要点を次に掲げさせて頂こう。

「今年 (1954) 7 月 1 日より 31 日迄本校の生徒 4 名が成虫の発現状況や交尾、産卵等を観

第 4 図 ヒメハルゼミの羽化 能生
在住室川右京氏撮影 丸山
良知氏寄贈写真

察したいというので 6 時、14 時、22 時と 1 日 3 回宛社叢に通つた。学校のある日などは思うように行かなかつたが、この間を通じて接触し得た自然の神秘は感じ易い生徒達に少なからぬ感銘を与えたように思われる。7 月 11 日から 31 日までの間 320 個体での観察の結果は 21 日の 31 頭が 1 日の成虫発現数としては最も多く 21, 22, 23 日あたりが羽化の最盛期であるように想われた。最初の 1 頭は 7 月 11 日の夕刻、最後は 7 月 31 日の夕刻であつた。7 月 11 日の平均気温は 6 時、14 時、22 時の平均、社叢での測定で 20.1°C、地温 (気温と同様、地下 10 cm) は 19.0°C であり、7 月 31 日では気温 25.2°C、地温 20.6°C であつた。発生密度の最も高いと思われる神社の本殿の真上辺りは鬱蒼たる樹林に覆われているので地温の日変化は殆ど認められないようである。従来成虫発現の最盛期は 7 月 10 日附近ということであつたが、今年は随分遅れたように思われる。羽化の初期のものには雄が多いことはその脱殻から推測された」

私の静岡県や千葉県での経験から「最盛期は 7 月 10 日附近」というのは少し不審で丸山氏始め地元の

の方々の今後の調査に俟たいと念う。私が白山神社を訪うた時は、少くとも今年是最盛期に当つていた訳で、上記丸山氏の書信がそれを裏書している。

本項を草するに当り資料を恵送され或は有益な示唆を与えられた越佐昆虫同好会の樋熊清治、服部欣一、丸山良知 3 氏に御礼申し上げる。夏日ヒメハルゼミの盛な声を聴くのに能生の地は、他地方から出かけて最も快適な環境と感ぜられたのである。

日本海方面の発生地としては今日能生と兵庫県城崎地方* のほか知られていないのであるが私は「虫界速報」第 31 号第 3 頁 (1954) に鳥取県立科学博物館の西村公夫氏が同県下にヒメハルゼミの新産地ありと書いておられるのでそれを知りたくて早速同氏に照会したら「そのヒメハルゼミというのは今年 (1954) 7 月 18 日鳥取県八頭郡佐治村余戸 (標高 300m 強) のとり遣されたシラガシ等の原始林の一角で鳴声はかなり聴かれたが採集したのは 1 ♀ だけである; 採集者は小林一彦その他 4 氏で、場所としては比較的奥地で而も寒冷地であるが、面白いことにこの附近は標高 250m 位からブナ帯が存在する所もあれば、それより高い所の谷間などに常緑闊葉樹が存在している」との御返事を頂いた。西村氏からは後に現地の地図及び更に詳しい記事を寄せられたが其等をここに掲げられないのは残念である。同氏のお手数を深く謝する。ここは地図で見ると日本海岸からは 20km 余隔たり岡山県境に近く、能生とは全く違う周界のようである。併しヒメハルゼミの 1 新産地を得たことは愉快である。

III 茨城県片庭の発生地

ところで谷氏、松村氏の扱われたヒメハルゼミと全く同一のセミが所の名物として、旧幕時代より近隣に聞えた事実が茨城県下にある。それは西茨城郡北山内村大字片庭字大内無格社八幡社境内及び字氷上 柳巖寺裏山林の何れもシイに所の人が“大蟬”の方言で呼んで来たセミである。本種は体は日本産のセミの中でも小さいほうであるが合唱すると盛な蟬時雨 (それはヒグラシのものなどに較べると趣を欠くが) となる。そして鳴いている本体を容易に認めにくい。声はすれども姿は見えず、定めし大きいセミが鳴くのであろうと考えてオオゼミの名が出来たのかも知れない。その盛鳴期が短く沢山のセミが忽然と現れて又忽然と姿を消すように見えるのも土地の人には不思議と感ぜられたに違いない。弘法大師に因む面白い伝承も伝つて位である。旧幕時代に所の殿様笠間藩主が季節にはきまつて来聴した由で、藩士その他の来聴者が多く「音に聞えた」というのは斯ういう名物を指すのであろう。しかし明治維新以後は次第に関心を失われたらしい。大正 14 年 (1925) の春堀江広氏が片庭分教場に赴任してからこのセミの盛な鳴声を耳にして奇異に感じ 1926 年の夏から調査に着手された。1929 年に茨城県下に陸軍特別大演習があり、統監の陛下にこのセミも御覧に入れたので、村民は天覧記念に大蟬保護同志会を組織し徹底的保護策を講ずることになった。天覧に供する際当時水戸高等学校教授菊地一氏が“大蟬”の標本を北大農学部昆虫学教室に送り査定を求めた。松村博士研究の千葉県産の標本と比較し同教室の内田登一氏 (現教授) がチバヒメハルゼミ *Euterpnosia chibensis* Matsumura と返事して下さつたそうである。片庭の大蟬がヒメハルゼミときまつたのはこの時にあつた。翌 1930 年加藤正世氏は現地を精査して本体はヒメハルゼミなることを確認、同年の「昆虫世界」第 34 巻第 399 号に「村民拳つて愛護する珍しい蟬に就て」と

* 粉川昭平氏は「兵庫県城崎地方におけるヒメハルゼミの新産地」と題し新昆虫第 6 巻第 10 号第 26 頁 (1953) に日本海方面に於ける新産地を紹介し私共を刮目せしめた。これは能生に次ぐ日本海に面する第 2 の発生地である。兵庫県城崎郡港村気比絹巻神社附近 (絹巻山) がそれで、ここより少し奥になる同郡城崎町四所神社附近の発生地と共に 1948 年の夏からその棲息を予察しておられたという。

題し、堀江氏と共に詳細に発表された。その後史蹟名勝天然紀念物調査委員たる鍋木外岐雄氏の調査があり昭和9年12月「片庭姫春蟬発生地」として天然紀念物に指定された。日本に於ける最初の蟬関係の指定天然紀念物であつたし、ヒメハルゼミ発生地指定もこれが最初である。又諸外国にも例のないものであらうと想われる。片庭は本種分布の東北限に当り、このセミの学術的価値と共に特殊の歴史的背景を重視されたものであらう。昔時は遠く1kmも離れた一里塚までも喧声を響かせたという。戦前堀江氏が調査された頃既に150m程隔たる片庭分教場裏に到達するに過ぎなかつた。戦後久しぶりに今夏(1954)この地を訪ずれて地元民のこのセミへの関心昔日に比すべくもないように見受けられた。

私は戦前1938年7月27日この地を訪ねその際の所見を「片庭の大蟬遊覧案内」と題して昆虫界第6巻第55号(1938)に寄せた。この頃どうなつていのかを知りたくて1954年7月27日再度の探訪を試みた。実に17年目であるが偶然にも同じ7月27日であつた。午前6時40分上野発常磐線平形で友部着、ここで小山行に乘換えて笠間着、“日本三大稻荷”の一つのある所であり又近年ダリアの栽培でも名高い(7月初旬開花)。駅前の笠間町営バスに乗り銀行角という所で降りる(ここまで徒歩も可能)。ここで茨城鉄道バスの笠間一茨木間行に乘換え片庭下車、あと徒歩である。戦後ここを訪ずれた昆虫研究家にどういふ方々があるか分らぬけれども沢田玄正氏が行かれたことは直接承つて知つてゐる。又戦後もヒメハルゼミは健在だという。茨城新聞の記事が本間敏弘氏により「虫・自然」第15号(1946)に紹介されている。楞嚴寺住職田中玄誠老師の談というのも載つていて「25日頃には真夏を謳歌しながらいつとはなしに姿を消してしまう」とある。

片庭でおりたが(といつても停車場を示す標識も何もない)曾てあつた案内図は既になくなつていたので間違つき何人もの人に尋ねて、どうにか八幡社に着いた。道順は、降りた右側角の自転車屋の所で右折する田舎道(一本道)を6~7分進むと左側に茶店があり、それより少し進むと石柱が2本並立している。その間の畦を行くとやつと通れる狭い径があつて、右手に握り飯状の石標が見つかる。文部省指定 天然紀念物 姫春蟬 昭和九年十二月廿八日 と5行に刻みつけられてある。17年前にもあつた石標だがその頃に比べ上部が少し欠けている。ここが石段の上り口で上ると祠があるがあたりは荒廃そのもの。ここ迄来る田舎道で僅かに声を聴いただけで、ここに着いたら寂として蟬噪なく失望。近くの農家の子供達が来て脱殻を7箇所探してくれた。当日は晴れて暑く条件はよいのであるが、セミの個体数がずつと少くなつたのかも知れぬ。1日の最盛期である日没前後にはよく鳴くことを子供達の話からも知り得たが、もうヒメハルゼミの聖地とはいえないようだ(昭和13年の「遊覧案内」には私は“聖地”という文字を用いた)。

もとのバス停留場まで引返し少し前方に進み左折して、それからの一本道を右に右にと進むと八幡祠から約1kmの奥に山寺がある。臨済宗妙心寺派に属する仏頂山楞嚴寺である。迷わずに着けばバスの停車場から15分の距離である。曾てここには聴蟬所と称する四阿も出来ていたのであるが、今や寺内は改築中で全く落ちつきを失つてゐる。石段を上つた所に 天下ノ珍蟬飛翔発生地 と記した標木が出ているだけである。ここでも蟬の声は全くきかれない。この改築がすつかり片づいた上でないとこのヒメハルゼミの現状は窺知し得ないと思う。午後4時20分笠間発、4時40分友部発、上野に帰着したのは6時57分であつた。17年前は学割使用でバス共3円8銭で済んだ。だから5円持つて行けば十分であつた。今は汽車バス共乗車

質に 500 円 (但し学割を使用せず) を要する有様で今昔の感に堪えなかつた。

茨城県では他に 1) 新治郡小桜村字菖蒲沢 2) 同郡草穂村字小山田が産地として知られている。これらは天然記念物に指定されない発生地である。関行孝氏が昆虫界第 4 巻第 33 号 (1936) に「茨城県のヒメハルゼミ新産地」として詳報されたので昆虫研究者にも知られるようになった。同氏に拠れば昭和 10 年 (1935) の夏と 11 年の夏に夫々「いばらき」(新聞) に紹介されたのが両地が世に出た始めであるという。関氏は眼科のお医者さんで県下の昆虫に造詣深かつた。既に他界され哀悼に堪えない。私は両地共まだ訪ねていないが今夏 (1954) 奇しくも私が片庭に巡歴した日に茨城県在住の枝重夫氏が菖蒲沢の発生地に赴きその観察結果を「筑波山塊菖蒲沢のヒメハルゼミをたずねて」と題し新昆虫第 7 巻第 11 号 (1954) に報じておられる。ここは枝氏に拠れば常磐線石岡駅から柿岡行バスに乗り小桜村の入口月岡の郵便局前で下車、広い田舎道を南に進み右折しながら約 3 km, 右手の突出した山の麓に菖蒲沢の部落がある。その部落の農家中村茂美氏の裏山約 2 反歩の林が発生地であるという。「今が最盛期なのだろうか (今年は遅れているらしい) 成虫も多数発生していた」(1954 年 7 月 27 日 枝氏) 「正確な数は勿論判らないが、片庭よりは多数である様に想われる」(1935 年 7 月 19 日 関氏) 之等新旧二つの訪問記を読み比べて、私は片庭の大蟬の凋落を想わずにいられない。関氏に拠ればこの林木の 7~8 割はアカガシで 3 株のシイの老樹もあり方言カシゼミであるという。今一つ小山田のヒメハルゼミも健在であることを枝氏よりの御来示で知つた。

IV 千葉県下に於ける発生地

ヒメハルゼミの松村博士による模式産地は Mt. Yawata in the Prov. Chiba とあるがその “Mt. Yawata” がどこであるのか分明しなかつた。松村博士の調査された材料は千葉県在住の林寿祐氏が明治 36 年頃採集し名和昆虫研究所に送附したものであつた。私は今でも同研究所に “千葉県長生郡鶴枝村 明治三十六年七月上旬” というラベルを持つヒメハルゼミが 2 頭あることを知つた。松村博士は所検標本のラベルに八幡山とあつたのをハチマンヤマと読まずに Mt. Yawata と扱われたので、後の研究者をしてその精確な産地を知るのを困難ならしめたのであろう。後に加藤正世、関行孝、黒岩行孝氏等の考証や実地踏査で千葉県長生郡鶴枝村八幡山 (今は千葉県茂原市上永吉八幡山) と決定した。黒岩氏が八幡山に来てヒメハルゼミを確認したのは昭和 10 年 (1935) 7 月 30 日のことである。此処はヒメハルゼミの模式産地であり、当時県下に知られる唯一の発生地でもあつたので、鶴枝姫春蟬発生地として昭和 16 年 (1941) 12 月に指定された。私は 1952 年 7 月 26 日ここを探訪したがここが指定されたのはよかつたと思つた。千葉駅から房総東線の安房鴨川行で約 1 時間にして茂原着、駅前かみなげしのバス上永吉行で 15 分にして終点上永吉着、あと徒歩約 15 分を要して八幡山という丘陵に着く。八幡神社の鎮座する丘陵でその社叢は周囲の林などより際立つて鬱蒼としており、亜熱帯性植物をも混え、シイの大木も何本もあり、密林を成し昭和 14 年 (1939) 8 月県で「天然記念物八幡山群生地」として指定したのは尤もだと思つた。成瀬幹也氏と共筆で「ヒメハルゼミの模式産地を訪う」の題で「新昆虫」第 5 巻第 12 号 (1952) に詳しく報じてあるから重ねて繰返さない。尚私は篠崎四郎いずみ氏の「天然記念物の話 動物篇」(日本交通公社刊 1949) により八幡山から南 6 km 余の夷隅郡瑞沢村大字妙楽寺地域内にも本種の発生することを知り、ここを訪ねた昆虫学者はまだ誰もないと想つたので 1953 年 7 月 27 日そこを探訪した。上記の房総東

線安房鴨川行で約1時間 20 分を要して上総一ノ宮駅下車, そこから小湊鉄道バスの大多喜行で約 25 分にしてお大日下下車, お大日様即ち東岳山妙楽寺の樹叢は目の前である。この時の探訪記も「蟬行脚」の題で「新昆虫」第7巻第2号(1954)に出してあるが, 私はこの潤葉樹林中主としてシイにヒメハルゼミの多数発生することを確認し得たのである。

篠崎氏(千葉県史蹟名勝天然紀念物調査委員)や江沢中葉氏(妙楽寺の発生地発見者)から県下では他に瑞沢村^{おおかみ とのべた}大字大上の殿部田の樹林, 夷隅郡大多喜町^{おおだき せんずい}泉水の虚空蔵山, 長生郡^{とよだ}豊田村, 同水上村等に発生地のあることを教えて頂いた。これらにつき現地調査をした昆虫学者はまだないに違いない。更に私は昨 1953 年に国立科学博物館動物学課の黒沢良彦氏から安房郡天津町^{きよすみさん}大字清澄の清澄山にも発生することを確かめた人がある由を承つた。ここは霊地としてよく知られており而も私は1度も訪ずれたことがなかつたので遊覧を兼ねて出かけることにきめたその前々日, 千葉県茂原市茂原在住の若菜一郎氏から来信に接し清澄山でのヒメハルゼミ確認の由来がよく判つたので同氏の御厚意に感謝しつつその要点を次に記す。

第5図 清澄寺本堂を望む。左方の森にヒグラシ多く鳴声盛, 右方背後の森林からもヒメハルゼミの声がきこえる〔市販の絵葉書より〕

「昭和 27 年 7 月 20 日清澄山で1♀を採集, 標本は現在も保存してある。昭和 29 年(1954) 7 月 25 日今度は 10♂♂ 6♀♀を採集, 全山に局地的ながら饒産することを確認した。尙 27 年に採つたものは出京の際黒沢氏に同定して頂いた」

そして同地の東大演習林の入口の

ナナマガリという地点で採集した1♂ 1♀に脱殻2箇を寄送された。これを拝見してもヒメハルゼミたることは疑ない。尙若菜氏は 1953 年は 7 月 26 日に清澄山に到り声のみを聴いておられる。同氏はここで昭和 26 年(1951) 8 月にルミスジミ *Arhopala ganesa loomisi* Pryer を4頭採集されたのも記憶せらるべき手柄であろう。

私は予定通り 7 月 30 日に清澄山に赴いた。東京からは日帰りは楽で夏季には国電東京各駅^{あわあまつ}から安房天津まで往復乗車券は割引で 500 円で買える。午前 7 時 32 分千葉発の房総東線安房鴨川行で 10 時に天津着, ここから日本バスの清澄山行で約 25 分を要して清澄寺前着, ここまで 6 km のかなり危い山道でバス代 30 円, ここから本堂まで徒歩 7 丁。参道は歩行た易い。

* 若菜一郎 千葉県下のヒメハルゼミの新産地 新昆虫 vol. vii, no. 13, p. 29 (1954) この中に 7-28-1954 10♂・6♀♀とあるのは前記のように 7-25 が正しい。

これを進んであと3丁とあるあたり、石段を上りきつて右側に茶店があり、その近くで下は深い崖となる林の中からヒメハルゼミ独特の蟬噪が聞えて来た。山門から寺内にはいつて左側にモリアオガエル発生^{せいしつ}の池があり蟬斗が多数認められた。本堂前の広場の南の隅に樹高150~160尺はあろうという杉の大木があつて刮目せしめられる。これが名高い清澄寺の大杉で杉の巨木としては日本全国を通じ屈指のものだそう既に天然記念物に指定された*。尙本堂左手の杉林はヒグラシの森と称すべく好箇の場所で折しも霧深く細雨も到つたせい^{せい}かヒグラシの声は美しくもかまびすしかつた。而も一杯に垂れこめた霧の中で境内の所々でヒメハルゼミの唱和が思い出したようにきかれるのである。晴れて夏らしい暑さの日であつたらその斉唱はさぞ賑かなことであつたろうと天気^{あま}の悪いのを歎いた。ここは千光山金剛宝院^{きやうざうじ}清澄寺でお山全体が清澄山県立公園になつている。東大演習林になつている地域内にも発生箇所は幾つもあるのではないかと考えられる。他日の調査に俟たねばならぬが、若菜氏の指示されたように全山のあちこちに多数発生するものであろう。当日山内ではヒグラシを採りニイニイゼミの脱殻を見つ^みけ子供達がアブラゼミの仔虫(方言 ジゼミ)を地中から掘り出したのを目撃した。

このように千葉県下には何箇所も発生地が確認されたが地図であたつてみると長生郡、夷隅郡、安房郡に分れるけれども夫々が相接した地点であるのに気づく。恐らくこれら3郡の中に将来更に幾つもの発生地が知られるようになる。私が検分した八幡山や妙楽寺は同型の標高の低い台地乃至丘で森林植生の林冠群植生類型は共にシイ型で、特に前者は型的と見られた。シイは発生に不可欠ではなくカシ型でもよいのである。今から10年前に比べ本州に於けるヒメハルゼミの発生地は踵を接して発見され曾てのように極めて局部的とはいえなくなつている。関東地方や信越地方に於ける発生地の生系調査は本種の分布を解明するに重要な鍵となると思うが、まだ資料が豊富でない。

地質時代第三紀に日本列島はアジア大陸東南の縁辺部であつたが、その頃今の沖縄本島に当るあたりで種の分化を起した本種は奄美大島、屋久島に当るあたりに北進し、更に九州南部や中部、四国南部に浸潤し余勢を駆つて太平洋岸沿いに北上を続け各地に定着、一部は朝鮮にはいつたりしたが、各地共その分布は或る程度まで当時の森林植生と平行して拡大され又衰微していつたものであろう。曾てヒメハルゼミの発生地であつたが今は絶滅している——という実例を私は挙げ得ないが、片庭八幡社のシイに頼るヒメハルゼミ達は既に劣勢となり、それら少数の老椎の枯死などが起れば“大蟬”のコーラスも今は昔の語り草となりかねない。ヒメハルゼミ等南方区系種が今日存続しているのは、氷河期の影響を蒙ること稀少であつたからと考うべきであろうが、現勢維持がせいぜいで今後一層優勢になろうとは思われない。その発生地が神社仏閣の境内であることが多いが、これはたまたまそういう信仰の対象となり霊地を成した所或は旧家の保有林などでは境内や山道の植生がおのずと保護されて斧鉞の入ることなく、その故に子孫を残し得たものであろう。そうでない所では既に死滅した場合もあるに違いない。千葉県は南部は主として第三紀層より成つているが、既知産地はどれもその層上に在るので、今後発見せられるべき発生地も自らこの地域に制約されるのではあるまいか。

(11月27日稿)

* この大杉のことは三好 学 天然記念物調査報告 植物之部第四輯(白鳳社刊1926)に詳しい。

Résumé

It was Late Tani (1905) who recorded scientifically *Euterpnosia chibensis*, one of the remarkable cicadas in Japan. She gave a new Japanese name "Himé-haruzemi", because it looked like "Haruzemi" *Terpnosia vacua* but somewhat smaller and more graceful. The scientific name, however, was not clear and it was described as Gn? sp?. In 1917, over ten years had passed since then, Dr. S. Matsumura announced that it was a new genus and species, *Euterpnosia chibensis*, appointing "Mt. Yawata in the Prov. Chiba" as the type locality. (note: "Mt. Yawata" is not right; it should be called Hachiman-yama Hill.) He distinguished *Euterpnosia chibensis* from other allied genera, that is, *Kamalata*, *Terpnosia*, *Rustia*, etc. because of the characteristic wart-like tubercle on both sides of the male's fourth abdominal segment. It may as well be regarded that there is no doubt today about the scientific name of this species.

Genus *Euterpnosia* is speciated into many species in Formosa today, and among all the species of the genus *Euterpnosia*, *Euterpnosia chibensis* is distributed most northerly. *Euterpnosia chibensis* is distributed from Ryukyu up to the Mainland, and it is of so-called the Oriental element and the limit of its coming up to north is, to some extent, similar to the one of *Papilio helenus nicconicolens*, *Cryptotympana japonensis*, etc. The areas of generation of this cicada are discontinuous in the Mainland, the period of lively singing of the imago is short and it has a queer habit of singing in chorus noisily by great number. It has also a characteristic shape and is one of the rare cicadas of Japan; There is even a folklore on this species at Kataniwa in Ibaraki Pref. as stated below.

"Once upon a time there was a rich saké-brewer living close to the Hachiman Shrine. Like other rich people, great misers were they, especially the old wife, who was so stingy that she thought nothing of giving the other some pain if it was for the sake of money. One summer evening, an old priest came and begged her a meal. But the woman, perceiving his poor clothers, said to him very rudely; "You beggar priest, don't approach. If I have any food to eat, I would rather take it myself than give it to a stranger like you. You'd better drink water only, and say your beads. Go away right now."

The priest answered, "Well, I see you will not spare me a meal though you have plenty at hand, but have used such abusive languages at me, telling me to live only on water and on beads. Then, woman, you live on water and take body of a cicada." Thus saying aloud, the priest pointed to an old big pasania which stood in the grounds of the Hachiman Shrine.

And lo! the old woman disappeared at that instant, and thousands of cicadas were found instead sitting on the old tree. Now it is said that the priest was indeed His Worship Kōbō in disguise who was then staying at the Tokuzōji Temple."

I planned in summer, since 1952, to visit in order the northern and east-northern limits of this species and also other places of generation of this species in Kantō area, and could visit five of them. This is about the observation I made then. The known homes of this species in Niigata, Ibaraki and Chiba prefectures are as follows. At the place with a note-mark it is appointed as a natural monument and preserved. There would be no instances in the foreign countries of cicada's being appointed as a national natural monument.

Niigata Prefecture: 1) Noh, Noh-machi, Nishikubiki-gōri (The northern limit)*

Ibaraki Prefecture: 2) Kataniwa, Kitayamauchi-mura, Nishiibaraki-gōri (The east-northern limit)* 3) Shōbuzawa, Kozakura-mura, Niihari-gōri 4) Oyamada, Mizuhomura, Niihari-gōri

Chiba Prefecture: 5) Hachiman-yama, Kaminageshi, Mobara City (formerly Hachiman-yama, Tsuruē-mura, Chōsei-gōri)* 6) Toyoda-mura, Chōsei-gōri 7) Minakami-mura, Chōsei-gōri 8) Myōrakuji, Mizusawa-mura, Isumi-gōri 9) Tonobeta, Mizusawa-mura, Isumi-gōri 10) Senzui, Ōdake-machi, Isumi-gōri 11) Kiyozumi-san (=Mt. Kiyozumi), Kiyozumi, Amatsu-machi, Awa-gōri.

彙 報

8 月中鹿島建設に委嘱し研究所屋上に第 1 次窩舎を設営することになったが同月末竣工, 取敢えずウズラ, カンムリウズラ (米国産), カナリヤ, ウソ等を容れた。

牧野兼所員は 10 月中旬東京に開かれた第 25 回日本動物学会大会席上, 学会賞受賞者となり「腫瘍における stemline-cell の説」と題し記念講演をなされた。

山階所長は正倉院の御物中鳥関係のものの調査の為 11 月 5～6 日第 2 回の奈良旅行をなされた。

黒田所員はキツツキによる被害調査の為 11 月 4～7 日岐阜県揖斐郡春日村六合小舎に出張された。

北大理学部動物学教室で牧野教授の許で哺乳類の病的組織などの研究を進めておられる高橋正樹氏は 12 月より当研究所の研究嘱託になられた。

12 月 11 日午後 3 時半より研究所内に財団役員会を開催, 山階理事長, 高島専務理事, 古川理事, 小熊, 内田, 黒田, 浅野, 筑波各評議員出席, 配布した資料に基づき理事長より昭和 28 年度収支決算報告, 昭和 29 年度予算につき説明あり, 審議に入り異議なく可決された。終つてから研究所の為常々格別の尽力を患わしている東 良三, 徳見 泰両氏にも加わつて頂き所員も合流して食事を偕にし懇談した。

前 号 正 誤

頁	行	誤	正
160	+2	—	);
168	+7	undar	under
172	+5	a orange	an orange
"	"	discurus	, discurus,
"	-5	T. m. batchianensis	T. m. batchianensis